

山本芳翠氏の逸話(中)

(黒田清輝畫伯談)

▲佛國にての芳翠氏 君の佛蘭西での師匠はゼローム氏でゼローム氏は遂に三年前に死んだ有名な畫伯である、外に同時代に佛蘭西に五姓田義松と云ふがあつてボナ氏に就いて學んだが今では横濱に引込んで居る又た藤雅三と云ふ人も十八年頃に佛蘭西へ往つて極真面目に勉強し乍ら日本畫が書けるので芳翠君に手傳つて日本風の趣味を持つた壁畫の類を外國人の註文で拵らへて居つた、芳翠氏は元來非常に器用で多趣味で日本畫も巧みであつたら金持ちの娘などに日本畫の教授をしてた事もあつた歸朝前には佛蘭西の銀座通りとも云ふべき處へ自分一人だけの製作品を陳列して展覽會を開いたなどで佛蘭西では中々有名になつて或時などは同國の文部大臣から晩餐の招待を受けた事もあつた棲居は丁度佛國大統領の官舎の前にあつて随分立派な畫室であつた

▲氏の畫風と傑作 畫風は佛蘭西で云へば師匠のゼロームに倣て夫から出た者だからクラシック派と云ふ可きだが氏のはクラシック派から出て一轉した、先づロマンチック派に屬して風俗を重に書く畫風であつた色彩には殊に力を入たが其方には餘程の才があつて形よりも其方が勝て居る、筆致にも疎放なものと緻密なものがあつて緻密な方はゼロームから出てるが疎放な方は西班牙のウエラスキスを慕つて荒く簡單に書き顯はす留學中の後半期にはシヤブランの筆意を眞似て居つた、其の緻密な點になると着物の縮緬か羽二重かなどにまで書分ける事に苦心して織麗を極めて居つた

氏の傑作として予の知つてる限りでは細谷安太郎氏の所持してゐる婦人の半身像で之はシャブラン流のもの美術学校にも少女の肖像がある其外伊藤侯の肖像摸寫もあるが和蘭大家のレンブランドの肖像杯である

門人は澤山あるが、今日畫家を廢して他職に就いて成功してゐる人もある、畫家としては白瀧幾之助、藤島武二、湯淺二郎等之等は留學中の人で東京に居る方では北蓮造、仁羽林平などがある

明治繪畫史を作る場合には多くの頁を君に割く價値があるが殊に予が感心する箇條を擧げると第一繪畫界の卒先者である事、第二油繪を眞に外國で學んだ人である事、第三繪畫の未だ盛んにならぬ時代から幾分か盛んになつた今日まで續けて畫家となつた事である

▲**一・生・貧・乏** 話先に戻つて予は日清戦争の時は君よりも先に歸つたが其後白馬會の組織には私と久米(桂一郎氏)と其他の友人が君の家に集まつて相談が出来夫れから今日まで交際の長くなるに従つて交情も綿密になつた最もお互ひに用が多いので平生は餘り出會ふ事もなかつたが牛どん會には一月に一回二ヶ月に一回必ず參會したものだ君が醉ふと予に向つて「僕は君を畫工に推薦して君に氣の毒な事をした畫工ほど貧乏なものはない」と云ふ事が度々あつた私は素より貧乏は覺悟してゐるから何とも思はぬが之は君自身の境遇からの述懐であつた君は幾人かの書生を養つた事はあつたが別に教員にもならず従つて月給を貰つて暮した事もなく始終困難な世を渡り兎に角大勢の家族を維持する傍ら自分の好む畫風をやつて居つたなどは實に賞嘆すべき事で其の後畫稿の多いには驚いた